



JAA通信

(Japan Autonomous Academy)

日本自治 ACADEMY 会報誌

Vol.13 2018年6月発行

(ホームページアドレス)

<http://www.japan-a-academy.jp/>

[発行]

NPO法人 日本自治ACADEMY

北海道下川町西町88番地2(株)谷組内

郵便番号 098-1205

Tel:01655-4-2595

Fax:01655-4-2596

E-mail:info@japan-a-academy.jp

Contents

●南幌町イベント:P1

表紙写真には、南幌町の若き農業生産者が取り組んだイベントの様子を掲載しました。

●寄稿:P2~P5

北海道庁を退職後、マレーシアに移住した毛利明雄さんに寄稿をお願いしました。

●会員セミナー講演要旨:P5~P9

北海道はまなす食品の経営的特徴や海外戦略について永田代表取締役のお話を伺いました。

●ACADEMY 事業紹介:P9~P12

10周年記念事業(高校生を対象とした作文コンクール)をご紹介します。

●フォーラム講演要旨:P12~P16

中国・上海に勤務経験のある北洋銀行地域産業支援部の吉田副部長をお招きしフォーラム「アジアと北海道のつきあい方パート10」を開催しました。



「野祭~YASAI~」(南幌町) 地場農産物の安心安全をPRし消費者と交流することを目的に、町内の若手農業者による「農猿(のうえん)」が結成され、秋に実施しています。会場では、地場野菜販売やトラクター綱引き、餅つき体験、トラクター運転体験、新米1俵(60kg)が当たる大抽選会などが行われ、町内外から多くの方が来場し、若者手作りのイベントを満喫していました。

「マレーシアに移住して」

毛利明雄

移住のきっかけ

常夏のアジアの国マレーシアの首都クアラ・ Lumpur (以下「KL」と略) に夫婦で移住して5年になる。

子供のころから臆病者のくせに好奇心旺盛な一面があり、初めての道を通ったり、見知らぬ土地を訪れるとちょっとした興奮を覚えた。父親の転勤に伴い小中学校で各1回転校した時は、憂鬱になるどころかしばらくハイな気分を抑えきれなかったほどだ。

長じて北海道庁に就職後、何度か外国出張の機会があり、その度に風景、風俗、文化、習慣等々何もかもが新鮮な異国の空気にじかに触れて、しばらく眠っていた好奇心が目を覚ました。

それ以来、いつの日か外国で暮らしてみたい、もう一つ別な人生を味わってみたいという思いが心の中に生まれ、次第に大きく育っていった。そして退職する頃にこの思いを実現すべく具体的な計画を立て、その後数年の準備期間を経て2013年秋に実行に移して現在に至っている。

移住先候補地としては、他にもアメリカ、カナダ、オーストラリアなど幅広く可能性を探ってみたが、移住ビザ取得の難易度や物価の状況等主に経済的条件からマレーシアに落ち着いた。この決断は結果的に正しかったと思っている。

マレーシアでの暮らし

KLはほぼ赤道直下の熱帯に位置し、日最高気温28~33度、最低気温24~25度ほど。これが一年中続き季節の変化といったものがない。確かに暑いが、湿度は意外に低く、北国育ちの私でも不快な蒸し暑さを感じない。高血圧の持病を持つ老人にはありがたい気候だ。

住居は2LDKのコンドミニアム(日本の賃貸

マンションに当たる)を借りている。家賃は日本円で月55,000円だ。90㎡あり、夫婦二人なら十分な広さだ。



コンドミニアムのリビングルーム

以下当地での暮らしぶりの一端をご紹介します。季節に関係なく日の出、日の入りはそれぞれ午前7時、午後7時なので、どうしても朝の目覚めは遅くなる。しかし特にこれといって予定があるわけでもない。ベッドでぐずぐずし、ようやく起きだす頃には大体8時を回っている。

野菜ジュースとヨーグルトの簡単な朝食後、パソコンに向かって、ネットのニュースをチェックしたり、日本のテレビのワイドショー番組を見る。そのあとは、コンドの敷地内にあるプールで水中ウォーキングをしたり、近くのゴルフ場のドライビングレンジで練習したり、時にはゴルフコースでラウンドもする。これらの全部を1日でこなすのでない。健康維持のため平日は何か一つ運動をすることを日課にしているということだ。気力、体力に余裕があれば午後から買い物などに出かけることもある。土日ほどこも混雑するので、安息日としてコンドに引きこもるのを原則にしている。

昼食は、自宅で蕎麦や冷や麦で簡単に済ませたり、外出先のフードコートなどでローカル料理を食べることも多い。料理の味は、ひいき目分を割り引いてもやはり日本のほうが上だと思う。マレーシアは外国人に対してオープンな移住促進政策をとっているの、世界各国の人たちが共生するインターナショナルな国になっている。このためか料理もバラエティに富んでいて飽きることがない。

それに地元の人たちが出入りする店で食べれば何といても料金が安い。オムライスとかチキンライスなどの単品メニューなら飲み物付きで現地通貨で10リンギット（日本円で280円）ほどだ。

夕食は自宅で家庭料理を食べるか、近所に手頃なレストランが多数あるので外食も多い。当地では夫婦揃って働いている人が多く、外食の習慣が普通に定着しているようだ。そんな事情もあるのか、コンド室内のキッチン設備が貧弱で、それがゆえにまた手の込んだ料理ができず、自然に外食が多くなっていく。

たまには他の日本人滞在者仲間とおしゃべりしながらの夕食会や昼食会を楽しむこともある。しかし、いわゆる飲み会はほとんどない。その理由は、当地は車社会なので、ほとんど全員がマイカーで移動していること、またセキュリティ上の理由もあって基本的に夫婦単位で行動しているためだ。自宅では週に2~3回夕食時にビールやワインを飲むが、酔うほど飲むことはまずない。これは健康には良いかもしれないが、少し寂しくないでもない。

週に1度日本人会館に行く。ここで妻がサークル活動に参加し、私はその間図書室で1週間分の日本の新聞をまとめ読みをし、読みたい本を借りてくる。蔵書は5万冊あり、新刊書も多いのでありがたい施設だ。

私の場合こちらでの生活は大体こんな感じだ。好奇心に燃えて海外生活を始めたに足らずいぶんとおとなしい、刺激と変化に乏しい生



プールサイドで佇む筆者

活に見えるかもしれない。

日本人リタイア組でも活動的な人や社交的な人は、もっとアクティブで濃密なKLライフを楽しんでいる。ボランティア活動で活躍している人もいる。週に4回もラウンドするというプロ顔負けのゴルファーもいる。シニアのライフスタイルは人それぞれでよいのだ。私には、いま現にやっている「基本のほほん、時々アクティブ」スタイルがちょうど心地よい。

割安な生活費

KL暮らしがありがたいのは、他の東南アジア諸国に比して公共インフラが整っていて、比較的快適な生活ができることと、衣食住にかかわる生活費や各種公共料金、ゴルフ料金などが安いことだ。

衣料費は常夏なのでとより最小限で済む。食費については、スーパーで買う食材は安いし、外食費も既述したように庶民的なフードコートなら1食300円程度だ。電車やバス、タクシーなどの交通費は日本の1/4程度、ガソリン価格は1/2程度だ。電気、ガス、水道など公共料金も非常に安い。住居費（家賃）は、グレードによってピンキリだが、日本人滞在者が住むコンドミニアムの平均的家賃は、24時間セキュリティ付き、コンビニ、カフェ、プール、フィットネスジム付き2LDK（家具付き）でおおむね4~8万円の範囲にある。充実した付帯施設や高い管理水準を考慮すれば驚くほどの安さといつてよい。

総じて当地の物価は、日本の1/2程度以下と言われている。私の場合1か月の生活費は夫婦二人の小遣いも含めて19万円ほどだろう。ということは、もし日本国内で同様な暮らしを維持しようとすれば計算上40万円ほどかかるということになる。その意味では、安上がりにそこそこ快適で充実した生活を享受させてもらっているということだ。

少し気がかりなのは今後の日本円の為替動向だ。もし経済が急変して急激に円安が進むような事態になれば、生活設計が土台から狂ってしまう。しかしこればかりは手の打ちようがない。

「ケセラセラ、なるようになる」で行く。

寛容で自由なマレーシアの人々

KL暮らし5年目の今、マレーシアの人たちは寛容で自由な心を持つ人々だと感じている。しかしその長所は、私自身の利害に関わって発揮されると、途端に短所(?)に見えてくることもある。

2年ほど前に現住所に引っ越しした際、トイレの水漏れに悩まされたことがある。その時我が家にやって来た配管工が何ともユニークだった。明るく愛想のいい青年だが、肝心の修理作業がどうにもテキトーなのだ。ニッコリ笑顔で修理完了を告げられたにもかかわらず、翌日には再度不具合が生じて連絡する。その繰り返した。結局この配管工は、我が家へ4回修理に来てほぼ4日間を費やし、ようやく1個の便器の修理を完成した。

最後の日には、何と約束の刻限を4時間も遅れてやってきたあげく、一言の詫びも弁解もなく、例のニッコリ笑顔で「オーケー。ノープロブレム。安心しな。」と言いながら得意げに親指を立ててみせる。何といういい加減！何という自由さ！何という自己肯定力！人生経験浅からぬ私といえども、この超想定外の展開にはただ呆然とするのみ。本来ならこの非常識な若造に対してビシッと「この時間泥棒めが！わしの時間を返せっ！」と一喝すべき場面だが、時間だけはある身であり、言語不自由の身でもあり、口をへの字にして押し黙るしかないのが情けない。

このエピソードは少し極端なケースだが、こ



KLのショッピングモールを歩き交う人々

れほどではないにしても、常識的日本人として軽いカルチャーショック体験は少なくない。

しかしそんな経験をしてなぜかあまり怒りを感じない。こちらの人たちは一般に率直で卑屈なところがなく、何となく憎めないのだ。好意的見方をすれば、当地には自由なというか、おおらかなというか、寛容な人が多いのではないか。

街なかで目にする人々のファッションにも同様なものを感じる。流行を追っているふうでもないし、おしゃれとも言えない。この年齢、この立場ならこんな服装といった暗黙の「お約束」のようなものもない。要するに思い思いの自由な服装なのだ。そもそも他人の視線や思惑を気にするといった感じが感じられない。

金子みすゞの詩のように「みんな違って、みんないい」社会だ。だから私のような年寄りも派手なTシャツ、短パンスタイルで平気で街を歩ける。これは気楽だ。

こちらの人たちと付き合っているうちに、ふとある考えが浮かんだ。もしかしたら世界では、マレーシアスタイルがスタンダードなのかもしれないという考えだ。

確かに日本のほうが何事もきちんとしている。商品もサービスも間違いなく質が高い。仕事は効率的だ。約束はしっかり守られる。ミスは滅多になく万一あった時は律儀に謝罪するのが普通だ。これが世界に冠たるメイド・イン・ジャパンだ。

日本にこうした他の追従を許さない優位性があるのは確かだと思う。しかしその一方で、家族との大切な時間も顧みず長時間労働に勤しみ、息苦しい思いで生きている多くの人々がいるという悲しい現実もある。このようないわば光と影がコインの表裏のようなものだとしたら、その一面だけを見て自画自賛するのはいかがなものか。折しも日本では「働き方改革」が議論されているが、いま日本社会に求められているものは、「働き方」に限らず価値観や生き方をも含めた多様な選択を受け容れる懐の深さではないだろうか。

ひと頃の勢いはないとはいえ今なお世界屈指の経済力を誇る日本。なのにそこに暮らす人々の日々の幸福感は今一つ薄いように思われる。

今年3月に公表された国連の「世界幸福度報告書」2018年版によれば、マレーシアは世界156国中35位であり年々順位を上げている。一方日本は欧米主要先進国から大きく水をあけられ54位にとどまっているという。

マレーシアは今のところ経済力では日本に及ばないものの、賃金は年々上昇して未来には希望がある。寛容の精神が根つき、人々は自由におおらかに生きているように見える。

人種や肌の色はもとより、言語も宗教も文化も異なる人たちがお互いに折り合いをつけて共に暮らす国マレーシア。それ故にこそ、ここでは寛容の精神が必須なのかもしれない。

この国の人たちを見ていて、人間の幸福というものはどういう生活の中にあるのかを改めて考えさせられた。(了)

会員セミナー講演要旨

北海道の食が注目されている中、北海道はまなす食品で納豆販売の道外・海外戦略に取り組んでおられる永田さんをお招きし1月13日に日本自治ACADEMYの会員を対象に、札幌市内でセミナーを開催しました。

「はまなす食品の経営的特徴と道外・海外戦略」

永田 吉則 さん
(北海道はまなす食品 代表取締役)

私の履歴書

永田と申します。本日は「はまなす食品の経営的特徴と道外・海外戦略」と題しまして、多少脱線するかもしれませんが、お話をさせていただ

プロフィール

昭和28年 小樽市生まれ。東京大学大学院工学系研究科修了。昭和54年 北海道入庁。渡島支庁社会福祉課を皮切りに、経済部、総務部、人事委員会、企業局などを経験。経済部商工振興課長、同・商業経済交流課長、食品加工研究センター副所長、経済部食関連産業室長、経済部次長を経て、平成25年3月 北海道を退職。同年4月 コープさっぽろ役員室部長兼北海道はまなす食品(株)副社長。平成26年5月 北海道はまなす食品(株)代表取締役社長 現在に至る。

きたいと考えております。よろしくお願ひいたします。

まず、はじめに私の経歴についてですが、出身は小樽、昭和28年生まれでして、高橋道知事と同学年です。若い頃は、湯川秀樹、朝永振一郎などのノーベル賞学者に触発されまして、研究者、ノーベル賞学者を目指し、高校、東京の大学、そして大学院まで進みました。化学を専攻していたのですが、大学院2年のある日、フラスコを振っていた時に、突然、この道を進んでいいのだろうかという疑問が湧いてきました。よく考えてみると、実験が嫌いだし、あまり向いていないということに気付かしまして、その道を断念したのです。向いていないことに大学院2年まで費やしたのですから、困ったものです。小さい頃から算数、数学の成績が抜群に良かったので、田舎の学校ですから、算数ができたら理科系に進むということが既定路線になっているんですね。とにかく、研究者は諦めようということになりまして、父親が病気がちになったこともあり、北海道に戻ろうと考えました。

それで当時、国の環境審議会の委員で、行政に関わっていた大学院の先生が公務員になったらどうかというアドバイスをしてくれたことから、公務員試験の勉強をすることになりました。ずっと理科系でしたので、やったことのない法学や経済学の勉強をしたわけですが、これが向いていたのか頭にどんどん入ってくるんですね。そして運よく道庁に合格しました。当時は地方の時代といわれていましたので、研究者を辞め



て気落ちすることもなく、その地方の時代の実現を夢見て昭和 54 年に道庁に入りました。

道庁に入ってから、2 年ごとに部署が変わり、いろんな所にいきましたが、通算で一番長かったのは経済部というところ。経済部で最初に配属されたのは資源エネルギー課で、その後、企画、新産業、先端技術、頭脳立地、食クラスターなど部内のあらゆる部門を転々としてきました。道庁不正経理問題を扱った総務部総括行政室にも勤務しましたし、人事委員会、企業局などにもいました。そして、平成 25 年に道庁を退職しまして、コープさっぽろに採用になり、北海道はまなす食品という会社に配属になりました。

障がい者のこと

ただ、はたと困りました。調べてみると、まずこの会社は障がい者の訓練と雇用をするための第三セクターなんですね。納豆を作るためだけの会社ではないんです。この会社が設立された頃（平成 5 年）、障がい者の訓練・雇用の「新しいモデルシステム」を作るということが、当時の横路知事の公約でして、数ある企業の中で、コープさっぽろがその役割を担ないまいしょうと手を挙げてくれたんです。

しかし、横路知事の支持母体は社会党で、コープさっぽろも横路知事を支持する企業でしたので、道が関与する第三セクターを全面的にコープさっぽろが主導することには一部から根強い反対がありました。そこで、コープさっぽろの出資比率（資本金 1 億円）を 45% に抑えて、あとの株主は道庁が全部集めました。道が 25%、札幌市が 10%、北広島市が 5%、そのほか、江別

市、恵庭市、千歳市の自治体や当時の北海道を代表する企業などからも出資していただきました。

次に会社の中身なんですが、納豆生産と珍味・菓子などの包装パック事業を行っております。工場では沢山の障がい者が働いています。私が入社した当時の 5 年前は障がい者は全体の半分でした。当時は 16 人で、今は 29 人です（平成 29 年 5 月現在）。13 人増えたと思うでしょうが、実は違います。16 人のうち、高齢や病気などで 5 人辞めていますので、私が入社した当時の人は 11 人で、新たに 18 人雇いました。

私が先ほど困ったと申し上げたのは、障がい者のことを知らなかったからです。それで何をしたかという、一人ひとりと話すことから始めました。どうやって話すか。食堂ですよ。全員集まりますからね。そして今では随分仲良くなりました。会社で人気投票をすれば、1 番はもう 20 年近くいる方なんですけど、自慢するわけではないですが、私は 2 番目ですよ。もう友達です。何でも言い合ってます。そういうことで障がい者をたくさん雇用しています。

売上なんですが、平成 24 年、私が行く前ですが、2 億 5 千万円です。そして今は（平成 28 年）は 8 億円なんですよ。経常利益は 130 万円だったのが、4,500 万円になりました。従業員は私が行く前は 32 人（職員・パート 16、障がい者 16）だったのが、平成 30 年 1 月 4 日現在で 71 人（職員・パート 42、障がい者 29）です。どんどん生産性があがってきました。

知的障がい者は難しいことはできませんが、袋に詰めたり、一つの作業を飽きないでこつこつやることは得意なんです。それから、障がい者は叱ったらだめなんです。失敗から学ぶことはないんですね。ほめることですね。ひたすらほめるんです。そうすると喜びます。私は今何をしているかという、ほめる材料を探しているんです。例えばこのようなことがありました。下駄箱を掃除している障がい者がいました。人のをやるんです。それでほめるんですね。みんなの前です。そうすると、ほかの人たちがほめられようす

るわけです。そして何が起こったかという、職場のポットのお湯を今代えているのは障がい者です。自発的にやったんです。

私は中小企業家同友会に入っているんですが、そこで障がい者をお雇いになったらどうですかといいました。職場の雰囲気が変わるんです。やさしくなるんです。障がい者をきちんと評価し、働く場を作ることが大事だと思っています。給料も上げております。つい最近（平成 29 年 12 月）の基本賃金は最低賃金（810 円）プラス 25 円にしました。ただ、障がい者を増やしていくには、仕事が増えていく必要があります。

コープさっぽろの障がい者の雇用率も 4%を超えています。400 人を超えています。一般的には 2%です。今それを 5%にしようとしています。

納豆のこと

次に、はまなす食品と納豆についてですが、かって 2 億 5 千万円の売上が今は 8 億円近くになっています。わずか 3~4 年で 3 倍以上になっています。その理由は何かというとな豆なんです。納豆会社は中小零細が多いので、全国でも大きい方です。うちの会社はコープさっぽろの特例子会社になっていますが、コープさっぽろが作って売っていた納豆をうちの会社へ全部統合しました。そのおかげで、売上が 2 億 5 千万円から 6 億 8 千万円になりました。その 6 億 8 千万円がなぜ 7 億 8 千万円になったか。私は先ほど、困った困ったといいました。実をいうと私は納豆が苦手なんです。ですから納豆のことがよくわからないわけです。納豆は健康にいいとわかってはいましたが、何も納豆でなくてもいいわけです。それで、障がい者を増やすためには納豆の売上を伸ばさなければならないということで、人の知恵を借りることを考えました。

「北海道はまなす食品納豆新製品開発プロジェクトチーム」を立ち上げました。メンバーは外部の方で、女性が多いです。意識的に女性の方をお願いしました。マーケティングやデザインの専門家、シンガーソングライターの方（「なっとのうた」を歌っているすずきゆいさん）、カリ

スマブロッガーの方（木村光江さん）などです。広告宣伝費がないので、カリスマブロッガーの方に入ってもらったら、何かできるのではないかと考えましたし、コープさっぽろの全店で「なっとのうた」をかけました。

男の方は、納豆の企画をやっている方や味のチェックをしてもらうために舌の感覚が凄い方にもお願いしました。物流の専門家などにも入っていただきました。

そして最初に取り組んだのは、納豆日めくりカレンダーの制作です。このカレンダーには 31 日分のレシピが記されていますので、1 か月経ってまた元に戻すと、1 年中、いや永久に使えるものになっています。

なぜこのようなもの考えたか。私はねばねばしている納豆が苦手なものですから、何とか納豆をおいしく食べる方法はないかということで、メンバーである料理専門家の都築先生に相談しました。そうしたら、先生はこの 31 のレシピを考えてくれました。和洋中バラエティーに富んでいるほか、アイスクリームに納豆を混ぜるというレシピまであります。

この取組は全国紙・道内紙に掲載されまして、今では、うちの会社の工場への視察者が、年間 500 人を超えています。その方々にこの納豆日めくりカレンダーを差し上げています。納豆の嫌いな方にもこのレシピを活用して、新しい納豆の料理を試していただくと、よりおいしく納豆を食べられると思っております。

それから、取り組んだのが、納豆の開発です。メンバーの方にいろいろ考えてもらいました。高級感を出し、たれに鮭節を活用した納豆を最初に開発しました。中国で販売しようと考えました。ネーミングは「ザ・北海道」。中国の人は北海道を 100%知っています。道東を舞台にした映画「非誠勿擾（フェイチェンウーラオ）」の大ヒットのおかげです。3 億人が見たそうです。しかし、残念ながら売れませんでした。なぜか。サケです。サケは回遊魚です。原発がからんだからです。回遊魚は中国ではダメなんですね。

その次に考えたのが、うちの会社の専務が提案した春夏秋冬の季節限定の納豆シリーズです。メンバーにアイデアを出してもらって、さくら風味は春限定、きのこは秋限定などと考えました。夏限定の商品は青のパッケージを使っているんですが、食品にはなぜか青があまり使われないんですね。このパッケージは担当のパートさんが一生懸命考えてくれたということで商品化されました。さっぱりとした塩レモン味で結構売れています。秋のきのこは味噌風味です。このようにアイデアを出していきまして、1年で全部作り上げました。

でも、さすがに冬はなかなかアイデアが出てこなくて、最終的には、デザイン専門家の三島さんから、北海道新幹線のキャラクターである雪だるまがいいのではないかと提案がありましたので、早速、古巣の道庁に行ってお願ひしまして、使わせてもらうことになりました。味はゆず風味です。そして、この季節限定納豆シリーズの取組が北海道知事から表彰を受けました。うれしいものです。うちの障がい者も喜びました。

また、「ふっくら北海道 小粒納豆」というのが、全国納豆鑑評会から賞をもらいました。この鑑評会では200点出て、20点しか選ばれないものなので、大変名誉なことなんです。これをいただいたことが輸出につながったんです。中国から直接に輸出の話がきまして、去年の7月にも出したんですが、12月には40フィートコンテナ（4万3,200個の納豆が入ります）で、苫小牧港から上海へ出しました。この1回の売上だけで三百数十万円です。

皆さんご存知のお笑いの「よしもと」からも賞をもらいました。金粉黒豆納豆というお正月とか母の日、敬老の日などに販売する金粉のついた納豆です。高いので普通の日にはあまり売れませんが、「よしもと」によれば主婦から人気があるといわれました。

そして、こういうこともありました。去年の8月29日に、あの「マツコ」さんの番組で、はまなす食品の納豆がおいしいということで紹介さ

れました。番組放映中、私の携帯は鳴りっぱなしでした。

また、私は、コープさっぽろで、納豆教室というのをやっております。「納豆のヒ・ミ・ツ」というテキストを作りまして、今まで30回以上開催しました。少ないときは5~10人ですが、100人単位の時もありますので、これまで通算1,000人くらいになります。そこで、テキストを使いまして、納豆の歴史だとか納豆の健康機能などの話を長いときは2時間ほど話します。こういうことをやりながら納豆の裾野を広げております。

時間もせまってきましたので、あと2点ほど。健康粉ドレッシングというのを作りまして。納豆菌と乳酸菌が入っています。原料の多くは北海道産で、乳酸菌は、旭川のアテリオバイオ社製のライラックの花から取ったものです。それから、旭山農志塾（清水町の障がい者施設）というところの有機の野菜パウダーを使っています。そのコーンとトウモロコシとニンジンです。粉ドレッシングの1/4は有機野菜パウダー。これはカット野菜にかけるといいです。この4月から海外向けに売り出す予定です。きょうは試供品を皆さんにお配りしましたので、是非お試しくださいと思います。

我が社の納豆の輸出状況についてご紹介いたします。自慢は販売先がほとんどリピートになってきています。普通は1回で終わりなんですね。シンガポール明治屋はこれまで3回です。そして何より大きいのは、2017年7月、12月のネット販売のための輸出です。うちのこれまでの輸出は併せると64,400個ですが、中国のインターネットで売っています。中国のインターネットの力は絶大ですね。

終わりに

終わりにになりますが、「北海道はアジアの宝」という言葉。これは私が言ったのではなく、私は中国に3回行きましたが、中国人に言われた言葉です。北海道の中で、「北海道がアジアの宝」と言っている人がいますか。ここに住んでいるとわからないです。私もそうです。寒いし雪も多

いし。でも彼らからすれば雪も魅力なんですね。

それから、これだけは押さえておいてください。私もこれを考えながらやっています。何かというと、ひとつには、アジア経済はどんどん伸びているということです。今や世界の富の40%はアジアです。人口も中国14億人、インド13億人、東南アジアは7億人です。地球の人口は73億人。半数は北海道が属する時差のないアジア地域に住んでいるのです。

二つ目には、地理的優位性。先日私が訪問したシンガポールはオイルの通るマラッカ海峡をもつという地理的優位性のもとで、世界の物流拠点として、驚異的な発展を遂げました。今、北海道の持つ地理的優位性はすごいですよ。食べ物はおいしいし、景色は豊かだし、雪も魅力的だと、中国人は言っているし、シンガポールの多くのタクシー運転手も私にそう話してくれました。

私は納豆のことも、障がい者のことも何も知らないで、ここまでやってきました。でも何とかなるんですね。道庁時代にお世話になった方に助けられましたし、社員にも随分助けられました。そして消費者の存在も大きいですね。場合によっては、これからの我々の消費者は北海道、東京だけでなく、上海かもしれないし、バンコクかもしれない。シンガポールやベトナムかもしれないですね。この消費者であるお客さんを大事にして、私もこれからますますがんばっていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。以上で終わります。ありがとうございました。

日本自治 ACADEMY10周年記念 事業「作文コンクール」

NPO 日本自治 ACADEMY は創立 10 周年を迎えたことから、記念事業として、実行委員会（委員長 日本自治 ACADEMY 相談役 谷 一

之）を組織し、道内の高校生を対象に、「北海道 200 年へのプロポーズ」をテーマに、「未来の北海道」作文コンクールを実施しました。コンクールには、道内の高校から 426 件の応募がありました。たくさんの応募をいただいたことに実行委員会一同、深く感謝しています。最終的に、応募作品の中から、審査の上、7 作品を選定させていただき、2 月 3 日に札幌市内で、作文の内容を発表していただきました（最終審査）。7 名の方々は 6 分の持ち時間で、最初に応募作品を発表し、その後、その内容を補足するスピーチ（題材を選んだ理由、現在の生活で感じていること、将来の夢など）を行いました。



札幌東高校 2 年の北所昌尚（きたじよまさなお）さん（上記写真）は、「50 年後の北海道へ～アイヌの人々へ、輝きを～」と題する作品の発表を行いました。



札幌東高校 2 年の小泉理咲子（こいずみりさこ）さん（上記写真）は「グローバル化への転換～外国人の定住促進と農業の再興～」と題する作品の発表を行いました。



下川商業高校 2 年の伊藤絢優（いとうあゆ）さん（上記写真）は「廃棄物から生まれるもの～循環型社会による利益～」と題する作品の発表を行いました。



江陵高校 3 年の堀田優菜（ほりたゆうな）さん（上記写真）は、「50年後の看護師像 ～患者さん思いの現場づくりを目指して～」と題する作品の発表を行いました。



札幌東高校 2 年の植竹優喜（うえたけゆうき）さん（上記写真）は、「北海道新幹線が運ぶ北海道の未来 ～北海道新幹線の今後の役割と可能性～」と題する作品の発表を行いました。



札幌東高校 2 年の小野素希（おのもとき）さん（上記写真）は、「最も若い高齢者の住む北海道 ～北海道の自然を活かした道民の健康づくり～」と題する作品の発表を行いました。



とわの森三愛高校 2 年の加藤巧也（かとうたくや）さん（上記写真）は、「祖父の背中を追って ～私の守るべきもの～」と題する作品の発表を行いました。

7 名の方のスピーチ終了後、審査委員会（委員長 松本懿、委員 荒井宏明、委員 谷一之）による審査が行われ、グランプリなどの賞が決定しました。

グランプリには、札幌東高校の小野素希さんの作品が選ばれ、ほかの 6 名の方は、それぞれ、準グランプリ（2 名）、ACADEMY 理事長賞（1 名）、グリーンシード賞（1 名）、夢ロマン賞（2 名）に選ばれました。（紙面の都合上、グランプリ作品のみ紹介します）

【グランプリ作品】

「最も若い高齢者の住む北海道 ～北海道の
自然を活かした道民の健康づくり～」

札幌東高校 2年 小野素希

多くの人は北海道といえば新鮮な野菜や魚、豊かな自然を思い浮かべるでしょう。観光客もほとんどが、これらの自然を求めて訪れています。しかし現在、この北海道の第一次産業を支えているのは少数のお年寄りであり、彼らにかかる負担は計り知れないほどでしょう。これから50年後、今深刻な少子高齢化や、農産業従事者の高齢化問題、後継ぎ不足問題が果たして改善されているかという、そうではないと思います。まして少子化により50年後、60代になった私たちの世話をしてくれる人は急減し、機械がさらに発達することで、生活習慣病患者が増え、寿命は縮み、人口減少。高齢者の割合が高い北海道にとってこの状況は他県よりいち早く訪れることでしょう。今、北海道はこの高齢者の問題を解決することが非常に重要なのです。

そこで私はこう考えました。高齢者を世話する人がいないなら、高齢者自身が自ら健康を保ち、世話が必要な場面をなるべく作らないようにしたら良いのではないかと。

北海道は自然がとっても豊かで空気がきれいです。また野菜や魚や肉も新鮮で健康に良いものばかりです。北海道の新鮮な特産物を活かした食生活の改善。ファストフードで食事を済ませがちな人々には特に勧めるべきです。しかし食べ物を活かすにしても作る人がいないならまったく意味がありません。なのでグリーンツーリズムやエコツーリズムを活発に行き、今の若者へ自然と触れ合うことがどれだけ楽しいのか、どれだけ大切なのかを伝えるべきだと考えます。また、札幌や旭川などの都市部にもスーパーではなく、市場を設け、生の食べ物を見せて北海道の新鮮な食べ物をより身近に置くのも

良いでしょう。これらによって若者たちの第一次産業への関心は高まり、後継ぎ問題が少しは改善されるのではないかと思います。

その他にも、休日には家族でハイキングや海での海水浴、冬にはウィンタースポーツを楽しんで体を動かすことも健康維持にはとても役立つでしょう。これほど健康保ちに必要環境が整っているのは他県にもあまりありません。これらを活用せずにいるのは大きな損をすることだと思います。

高齢者の増加を抑えることは不可能です。それなら発想を転換して、北海道の自然を活かした道民の健康維持で、心身ともに元気で若い高齢者が住む都市を作り上げるのはどうでしょうか。笑顔の絶えない町、元気なおじいちゃん、おばあちゃんと一緒にする楽しい食事の場、考えただけでワクワクしませんか？

「他県と比べてどうしてこんなに北海道の人は活気が溢れ、元気なんだろう」「北海道に行ってみよう」「暮らしたい」そう思ってもらえるようになるのが私の思い描く50年後の故郷、北海道です。
(了)



熊谷雅幸日本自治 ACADEMY 理事長からグランプリ の表彰状を受取る小野素希さん

表彰式終了後、審査委員長の松本懿さんから次のとおり、講評がありました。

『みなさん、おめでとうございます。7名の方からスピーチをいただきましたが、ひとつは北海道の特徴やメリットをどのように生かすかと

の観点からの提案、もうひとつは、知恵を結集して北海道が抱える課題を克服し、どのように新しい道を切り拓いていくかとの観点からの提案、大別してこの二つのアプローチがあったように思います。いずれも迫力のある提案をいただいたということで高く評価したいと思います。

また、皆さんにおかれては、これから作文だけではなく、小論文や論文を書く機会が出てくると思いますが、是非書くということに積極的にチャレンジしていただきたいと思います。

書くということは、正確に物事を伝えるという人間を作るという側面だけでなく、指導者に不可欠な論理的な思考力を育むという側面がありますので、どうかこれからも書くということに挑戦をしていただきたい。それから、今日のようなプレゼンテーションに大いに挑戦することを通じて、北海道、さらには世界を担う人材として、はばたいていっていただきたいということを申し添えて、講評に代えさせていただきます。(了)』

なお、7名の方々の応募作品や発表の様様については、当 ACADEMY のホームページで紹介していますので、ご覧ください。

(ホームページアドレス)

<http://www.japan-a-academy.jp/>



発表者を囲んで（前列：発表者、後列：審査員の方々）

フォーラム「アジアと北海道のつきあい方パート10」講演要旨

日本自治 ACADEMY とグリーンシード21では、アジア地域との結びつきをより深めるため、2008年から毎年、フォーラム『アジアと北海道のつきあい方』を開催しております。

今回は、講師として、中国・上海での駐在経験がある北洋銀行地域産業支援部の吉田信昭さんをお招きして、自身の海外勤務体験や、アジアで活躍する北海道の人・企業を紹介していただきました。

「アジアで活躍する北海道の人・企業」

吉田 信昭 さん

(北洋銀行 地域産業支援部 副部長)

プロフィール

昭和 39 年東京都にて生まれる。昭和 63 年 北海道拓殖銀行入行。平成 4 年 国際部(東京)国際資金為替グループ。平成 10 年 北洋銀行入行 外国為替推進部調査役。平成 16 年 北五条通支店次長。平成 19 年 国際部上海駐在員事務所長。平成 25 年 国際部国際課長、平成 28 年 北七条支店長。平成 29 年 10 月から現職。

上海駐在員事務所の 3 年間の体験

(2007 年 10 月～)

吉田でございます。きょうはよろしくお願いたします。今日のお話の内容ですが、まずは私の上海駐在員事務所時代のお話をさせていたいただきまして、次に、アジアで活躍する北海道人、お二方をご紹介したいと思います。お二方とも私が 2007～2010 年の 3 年間、上海の駐在員事務所長をしておりました時に、現地でお付き合いのあった北海道の方です。現在も、それぞれ台湾、上海を拠点に、アジアで活躍されています。それから、現在、地域産業支援部で北海道の観光

産業の支援という仕事の中でインバウンドという分野で海外と関わってまいりましたので、時間があれば、そこで知り得たお話などもご紹介させていただけたらと考えております。

また、おことわりということで、本講演で私がお話しした内容、ご紹介した情報・資料等につきましては責任を持ちませんというような内容のことを書かせていただきましたが、私は、何分、銀行員という立場でもありますので、皆様からお叱りを受けないようにという気持ちでお話ししたいという趣旨のことですので、何卒ご理解をいただきたいと存じます。

私は2007年10月から3年間、上海に駐在していましたが、行った時は、2008年8月に中国で初めてオリンピックを開催するということが大変盛り上がりおりました。そのあと、オリンピック直後にリーマンショックが起きまして、経済的な動揺が非常に大きく、実は、上海というのは、欧米、特にヨーロッパの企業が多く進出しています、ヨーロッパ企業の受けた打撃がそのまま上海を襲ったというような状況になりました。

株の価格でいいますと、当時、6,000ポイントぐらいあったものが、リーマンショック直後には1/3の2,000ポイントぐらいになってしまいました。株がこれだけ暴落すると、ブラックマンデーなどを経験した我々日本人は大変なことだと考えるんですが、投資ブームが始まったばかりの上海では、手持ち資金のごく一部を投資している人がほとんどという状況でしたので、上海の人たちはこの時の株の暴落をかなり気楽に捉えていました。

深刻だったのは、上海に進出していたヨーロッパの企業で、中国での事業をやめざるを得ないところまで追い詰められた企業が多かったことから、2008年のクリスマス休暇で本国へ戻ったかなりのヨーロッパ人が2009年の正月が明けても、上海に戻ってこないということで、街を歩いているヨーロッパ人が一気にいなくなつたという状況を今でも覚えています。



ただ、中国はこのあと2009年4月に40兆円という公費を投入して経済対策を打ちます。中国というのは事をやり始めたら一気にできるというところがありますので、この40兆円があつという間に国中に浸透しまして、急激な景気回復を成し遂げるとともに、街を歩いていなかったヨーロッパの人たちが、いつの間にか歩くようになりました。ヨーロッパの人たちは中国の工場で作ってヨーロッパで売るとことをしていましたが、中国の工場をどの世界よりも早く動かした方がビジネスにとって得なのではないかということを思い始めて、上海に戻ってきたのがとても印象的でした。

実は、この頃、上海では北京オリンピックが終わったら、これからは上海万博の番だということになっていまして、2009年の40兆円とともに、建設ラッシュが始まりまして、瞬く間に、高速道路ができ、新幹線ができ、地下鉄が延伸されました。

それから、2010年4月になって、上海万博が始まって、9月には北海道の日というのを現地で行いました。ここに上海の地元のお客さんが殺到して、私も北海道というのが、いかに上海の人たちに受け入れられているのかを実感しました。これは、2009年のお正月に中国全土で北海道を舞台にした映画が上映されたことが大きかったと言われています。題名は、「非誠勿擾（フェイチェンウーラオ）」です。

実は、それ以前に、高倉健さんが主演の「君よ憤怒の河を渉れ」という映画がありました。中野良子さんも出演しておりまして、北海道日高地

方を舞台にして撮影されました。この映画は中国人が大好きで、これが中国の中で、第一次北海道ブームと呼ばれています。

「フェイチェンウーラオ」は道東のきれいな秋を撮ってくれています。それまで北海道は何となくいいなと思っていた中国人に、北海道の景色を鮮烈に見せることによって、一気に北海道ブームが起きました。当時、新千歳・上海間の直行便は3便で、私が上海に行った時は一番小さい120人定員でしたが、このブームを契機に、運航している東方航空は持っている一番大きな飛行機を投入しました。

この後、2010年9月に東シナ海で日本の領海内で操業していた中国漁船に対して、海上保安庁が警告を発したところ、体当たりして対抗してきたという事件が起きました。これが尖閣の前哨戦としてあった問題ですが、この時に日中関係が一気に変化しました。

そして、この問題が尖閣問題へと発展し、さらに2011年3月に東北で不幸にして震災が起りまして、中国から北海道に来る方の数が、その後ほぼ1年近くの間は激減の状態が続きました。

ただし、今の姿は当時をはるかに上回る数の方が来てくれています。海外からのお客様を呼ぶというのはこういったリスクもはらんでいるわけです。当時思ったのはあまり一国に集中しないで、いろんな国から来てもらう必要があると思いました。

ここで、私は家族と共に上海に赴任していましたので、上海で日本人の子供たちがどのような教育環境にあるのか、ご紹介したいと思います。先生は日本人、生徒も何%かの中国人がいますが、ほとんどが日本人です。教科書も日本から持って行っています。文科省の学習指導要領に基づく授業が行われています。学校の形態としては私立ですが、先生の半分は日本で教員をされていた方です。授業料は私立ですので、日本の公立のようにはいきませんが、現地の駐在員の場合は企業が赴任費のひとつとして学費を補助

してくれるので、個人的な負担はそれほどありません。中学校では体育会系や文科系の部活動もありまして、日本の学校とあまり変わりなく、生活して、勉強しています。ただ、治安上の観点から、子供たちの安全が最優先に考えられているので、一斉登校、一斉下校となっています。部活動が終わると、バスで一斉に自宅へ帰ります。そこが日本と少し違います。

私がいた当時、小学校でいうと、上海には二つの日本人学校がありまして、合わせると4,000人以上の子どもが現地で勉強していました。それだけ日本の企業が上海に工場や事務所を持っているということです。日本人学校の小学校の児童数でいうと、いつもタイのバンコクと競ってしまっていて、バンコクの児童数は3,000~4,000人くらいです。

また、児童生徒は全員転校生です。3年ぐらいで親が転勤しますので、1年で1/3ぐらいが転校してしまうことになります。それだけに、子ども同士の結束が強く、新しく転校してきた子にはみんなでどんな風に暮らしていけばいいのか、どこで遊べばいいかなどを教え合って生活しています。

特徴的なのは、児童生徒の出身地でいいますと、ほとんどが東京より西の地域です。北海道から行った家族は数えるほどです。なぜかという、上海は製造メーカーが多く存在している地域から来ている子どもが多いためです。そういった意味では北海道は製造業が少ないので海外に人を出す企業が少ないのかなど当時は感じていました。

台北で活躍する北海道人 藤川伸生さん

さて、ここで、アジアで活躍している北海道人のご紹介に入りますが、一人目は、今、台湾ヤクルトの副総経理(副社長)をしている藤川伸生さんです。私とは上海でのゴルフ仲間でした。この方は1960年生まれ、函館市戸井町出身で、函館工業高校で野球をやっている、甲子園へ行く寸前までいったと聞いています。今もアスリ

ートです。走っていらっしやいます。

高校を出てから、ヤクルトに入り、その後大学に入り、2001年に中国の広州市に派遣されました。日本ではヤクルトの宅配は当たり前なのですが、そこでの仕事は現地で宅配を立ち上げることでした。その様子は、テレビ東京の経済番組「ガイアの夜明け」でも紹介されています。

広州という全く初めての地で、ヤクルトの訪問販売をやろうとした時に、大きな障害がありました。何かというと、中国のマンションには安全のために、ガードマンが必ずいて、勝手に入れない、要は訪問販売ができないということでした。そこで藤川さんが考えたのが、まずは宅配募集チラシを街頭で配ることでした。チラシにはアンケートが付いており、アンケートに答えると、自宅までヤクルトワンパックを無料で届けるというものでした。

そこでアンケートに答えてくれた方には、ヤクルトをお届けするため、ガードマンの方に、「何号室の方からお届けするように言われました」と断ると、ガードマンはマンションの中へ入れてくれたのです。そして、ヤクルトをお届けするとともに、郵便受けに宅配募集チラシを入れると、そこからまた電話が来て、ヤクルトをお届けするという好循環になったということです。

今は、藤川さんの始めたこの方法で、広州では、ヤクルトレディーが1,900名いるとのこと。また、現在でも、世界各地で訪問販売に取り組む際には、この方法を採用しているとのことでした。

そして、その後、藤川さんは上海で私と一緒に時代を過ごした後、一旦東京に戻りまして、2014年に台湾へ異動しまして、ヤクルトの仕事をしています。

(ここで、動画で、台湾で藤川さんが行っているヤクルト製品の売込みの模様を紹介)

上海で活躍する北海道人 板谷美幸さん

次に、板谷美幸さんですが、板谷さんは、道北

の当麻町出身で、JALの客室乗務員をされていましたが、一念発起して日中友好協会の国費留学生として上海外国語大学に留学します。その後、そこで身に付けた中国語の語学力と上海の街の知識を持って、上海でのドキュメンタリー番組の取材などのお手伝いをするメディアコーディネーターの仕事をしていました。

私も上海にいる時に、「地方銀行合同食品相談会」というイベントを現地で行いましたが、その際に、板谷さんにコーディネーターとしてお世話していただきました。中国語が堪能で、また上海語と中国語というのはかなり違うんですが、その上海語にも通じ、現地の従業員の方と精神的に働いていました。

そして今は、ベクトルチャイナの総経理(社長)をされています。ここは、日本の上場企業であるベクトルの中国現地法人ですが、板谷さんがどのようなことをやっているのかというと、中国も今やSNSなんですね。フェイスブックは中国では規制がかかっている使えないので、ウェイボーといったSNSがあるんですが、それを使って、日本企業のPR活動サポートなどを行っています。上海を基点にして、北京や台湾、広州、香港などもエリアに収め、中国全土を駆け回って仕事をされています。

(ここで、板谷さんが行っている上海での日本企業のPRの模様をプロジェクター画面で紹介)

実際に今私が行っている北海道の観光産業のサポートという面でも、今後、板谷さんの力を借りたいと思っていて、例えば、北海道の各地域の良さを板谷さんのSNSの力を活用して発信していくこともできるのかなと考えているところでございます。

ただいまご紹介したお二方からは、メッセージをいただいております。ご紹介します。

台湾ヤクルトの藤川副総経理は、『北海道を愛する北海道出身のオヤジとしての意見です。北

海道の若者には、是非一度海外もそうですが、北海道以外に出て、外からの視点で北海道を見てもらいたいと思います。そうすると、長所や短所を冷静に把握することができます。ホテル・ロイヤル・ニッコー・タイペイ総支配人の笹谷久雄さんも栗山町出身です』

ベクトルチャイナの板谷総経理は、『世界そしてアジアの中で、日本人、北海道人の私たちが将来どのような役割を果たして行くべきかを考えるには、自分自身が海外へ出て、その眼で海外から日本を客観的に見るという経験が大いに役立つと思います。「百聞は一見に如かず」 皆さんも海外を通じて、日本そして北海道を見つめてください』

私は3年間、北海道から離れてみて、中国の人は予想以上に、北海道を憧れの地として思ってくれていると感じました。我々が見ている何気ない景色というのは、異なる国の人たち、特に雪の降らない東アジアや東南アジアの人たちからみると、物凄い価値があって、癒される景色なのだと思います。

それがずっと住んで、毎日見ているとだんだん慣れてきて感動が湧かなくなるのですが、ほかの人たちが自分のふるさとをどう思うのかというのをやはり感じる必要があると思います。ですから、きょうここにいらっしゃる高校生の皆さんには、海外に行くというチャンスがあれば、是非果敢にチャレンジしてもらいたいと思います。

おわりに

時間もせまってまいりましたが、最近、観光の仕事をしておりますので、その関連のお話を少ししたいと思います。北海道から海外に輸出している金額ですが、平成22年度は3,408億円でした。外国人が観光で来て北海道で消費した金額ですが、平成22年度は856億円でした。昨年度（平成28年度）は、輸出額が3,710億円に対し、外国人消費額は3,705億円と、もう並んだと

いうことです。

輸出をするというのは実に大変なことなんです。何故かという、食品でいえば、いろんな規制がかかっています、その規制を相手の国に合わせて、場合によっては作り直さなければならないのです。そうしていくと、商品の魅力がなくなってしまうこともあります。

それから輸送というものが生じるので、その手配とか、運賃もかかります。日本で買えるものが、2倍、3倍となっても、現地で売れるだけの商品の魅力づくりといったことまで考えていかなければなりません。

対して、外国から北海道に来てもらうというのは、もともとそこに魅力があるということですから、それを少し磨いたりとか、言葉の問題を解決してあげたりとか、わかりやすい説明をつけてあげたりとかということに対応できます。

たとえば、日本に来ておいしいと思ったら、ではそれを北海道から輸出してくれたら買うよと言ってくれるかもしれないので、まずは順番としては、輸出を考えるよりも、北海道に来て食べてもらう、使ってもらうということをもっと考えていった方がいいと思っています。

最後になりますが、私は上海で、家族共々、貴重な経験をすることができました。上海というのは、もちろん地名なんですが、英和辞典を引いていただくとわかるように動詞としても存在しています。歴史的経緯などからそうなったようですが、第二次世界大戦直前、上海には共同租界（外国人居留地）があり、混沌とした秩序のない街であったようです。こういうところから、今の商業都市、上海が育ってきました。中国のほかの都市とは少し背景が異なります。

ここで3年間生活できたこと、また子どもたちにも上海の生活を体験させることができたことは、今も良かったなと思っております。子供たちが将来社会人として生活していくうえで、当時の上海での生活が役に立っていくと思っております。本日は、お話をする機会を設けていただき、どうもありがとうございました。